

はじめに

本書は精神科病院認知症病棟に入院している中一重度認知症患者の治療現場からの報告である。従来、認知症関係の啓発書やマスコミの論調は主としては、認知症は「もの忘れ外来」や「かりつけ医」で診断し、その後はこれらの医療機関を必要があれば受診しながら、ケアは「介護保険サービス系」という流れである。したがって、ややもすると、この流れですべての認知症に対応できるような誤解が生じているのではないかとすら思える。たとえば、先日外来で、アルツハイマー型認知症の患者の家族が「母はTVで見た認知症の人とは違う。診断が間違いではないか」と。私もたまたまそのTVを見ており、TVの人は軽度であり、この患者は重度であった。そのように説明しても、何となく釈然としていない様子だった。このことは、中一重度認知症の入院型認知症についての情報が普及していないことを意味している。そこで、前作では中一重度認知症の外来での対応について述べたが、本書では入院での対応を中心に述べる。

従来から認知症にならないための予防法についての情報は氾濫している。しかし、その予防法を実行しても認知症になる人もいるのは事実。また、このような予防法を実行すれば進行を遅らせるといふ意見もある。しかし、進行を遅らせても進行するのも事実。したがって、最初は軽度であっても、重度に向かって進行していることになる。前述したように認知症の診断は医療機関で、ケアは介護保険サービス系という流れだけでよいのだろうか。この流れの後はどうなるのか。

認知症が進み中―重度になり、周辺症状も出現し家庭や施設で対応困難になると精神科を受診したり精神科病院に入院となる。精神科病院に入院しても身体的には廃用症候群になり、認知機能は重度になってしまふ。このような人にどのように対応するのか。

一部の識者と称する人たちの中には精神科病院に認知症の患者を入院させるべきではないと声高らかに述べている人たちもいる。私も、入院せずに、自宅での介護に勝るものはないと信じている。しかし、精神科病院に入院している認知症の患者がいるのも事実。それでは、入院させないようにはどうしたらよいか、あるいは早期退院させるためにはどうしたらよいか、入院中の患者にどのように対応することがよいのかなどという各

論は少ない。この流れの中で認知症を進行させないための方法だとか、患者への対処法が述べられている。その中に「その人の立場に立って」という言葉が出てくる。「その人の立場に立つ」ためには、高齢者の特徴は、その人はどのような時代を生きてきたのだろうかなど高齢者を理解するための情報が必要である。こうした情報が少ないのも事実。

また、中一重度の認知症の患者と日夜奮闘しているスタッフに向けられる、一部の識者と称する人たちの妄言、家族の無理解がスタッフのプライドを傷つけ、ひいてはやる気をなくし、退職に追い込んでいるのも事実。これでよいのか。

そこで、これらの問題を解決すべく、精神科病院に入院している中一重度認知症患者対応から見た問題点について述べた。すなわち、私の講演会で好評を得ている「認知症になった時のための準備10箇条」や入院しているHDS-R 10点以下あるいは0点以下の人たちとの私の対応についても述べた。

さらには、認知症という疾患を患っている高齢者を理解するために一般的な高齢者の特徴、また、私を含めてこの世代の人がどのような時代を生きてきたかの理解の手助けになればと思います、私の生きてきた時代を回想法風に述べた。

そして、精神科病院への入院の契機の一つにはせん妄がある。せん妄を呈した患者を自宅で介護していると、普段とは違った激しい行動で、家族に心の傷を残し、入院し症状が改善しても退院を家族が渋ることもある。そこで、せん妄の発症を予防できれば精神科病院への入院患者は減少する。また、せん妄への理解が高まれば退院の促進にもなる。

しかし、せん妄をわかりやすく解説したものやせん妄の予防法についてはあまり述べられていない。そこで、「せん妄予防のための4D's&E」を提唱した。これまで、あまり触れられなかった、家族の危機や、スタッフのメンタルヘルスにも触れ「ストレス解消やいゆえよ」も提唱した。

本書で述べた内容は、秩父中央病院を主としたいくつかの病院での私の経験なので普遍性があるかどうかかわからない。対象は精神科病院に入院中の中ー高度の認知症患者である。本書はなるべく口語体にし、読みやすくしたつもりである。認知症全体について記載していないので、足りない点は専門書を参考に、さらには、拙書『重度認知症治療の現場からー精神科医ドクターHKの挑戦(1)』も参照してほしい。いうまでもなく症例については私の創作である。創作と言っても、何人かの症例の事実をつなぎ合わせて一つの症

例にしている。

本書の出版に当たっては、前作同様に秩父中央病院の院長内田里華先生はじめスタッフの皆さん、とくに相談員の内海巨史氏、医局の先生、同門の村田雄一先生始め多くの先生方にアドバイスを頂きました。また、統計処理は日本大学大学院の斉藤崇史先生にお願いしました。ありがとうございました。